

# 「あれ？足の裏に黒いしみが…」

ご経験ありますか？それは、「悪性黒色腫」かもしれません。悪性黒色腫は過去20年間で約4倍に増え、年間約12000人が新たに診断されていると推定されています。厚生労働省の人口動態統計では、700人の方々がこの悪性黒色腫により死亡しているとのこと（国立がん研究センター中央病院の調査結果(2002年—2007年)による）。とても危険なこの「悪性黒色腫」についてお聞きしました。

## 足の裏に黒いしみがありませんが、癌ではありませんか？

マスコミで足の裏の色素斑についてとり上げられる機会が時々あり、足の裏に黒いしみができると危険だという認識が一般に広がっています。この危険な足の裏のしみというのは、ほくろの癌とも呼ばれる悪性黒色腫(メラノーマ)のことで、癌の中でも比較的たちの悪いものです。そのため足の裏の色素斑

を心配され皮膚科外来を受診される方がしばしばいらっしゃいます。しかし実際には足の裏のしみが悪性黒色腫であることは非常に少ないのが現状です。大部分の患者さんは良性の黒子(ほくろ)です。その他に皮下血腫、足底の疣贅、異物による色素沈着、魚の目やたこに伴う皮下出血、青色母斑などの疾患のことがあります。したがって足の裏にしみがあるからといって心配しすぎる必要はありません。とは言っても、その少ない確立ながら悪性黒

## どのような場合に悪性黒色腫のいことが多ですか？

大人になってから生じてきた色素斑で鉛筆の太さより大きい、形が左右対称でなく不規則な形、色が多彩で一様でなく、境界が部分的に不鮮明になったり染み

出しのようになっていて、色素斑が拡大、隆起し、皮がめくれジクジクしたり出血する。このような場合は悪性黒色腫の可能性が高いと考えられます。逆に子供の頃から黒色斑があり、あまり大きさが変わっていないような場合はまず心配いりません。大部分は良性のほくろです。また1週間前は絶対無かったのに、急に大きな黒い染みが出てくるような場合も皮下出血のことが多くほとんど心配はいりません。

もちろん例外はあり、子供でも悪性黒色腫は皆無ではありませんし、5mmより小さなものの報告もありますので、心配な場合は皮膚科を受診してください。

## 診断せよの dermatologist のでしよか？

典型的なものであれば皮膚科の医者は診ただけでそれが悪性黒色腫かその他の疾患であるか判断できます。また肉眼で見た

だけで判断できない場合は皮膚を大きく拡大して観察する「ダーモスコピー」という方法でかなり精度をあげて判断することができます。このダーモスコピーで観察して色の濃い部分が指紋の溝に沿って平行に見られるときはほとんど良性のほくろです。これに対して指紋の丘の部分が黒く、溝が抜けているような場合は悪性黒色腫を疑う必要があります。

しかしダーモスコピーによる観察も万全というわけではありません。表面から診ただけでは診断できないこともあります。その様な時は経過観察や、確定診断のために皮膚生検が必要となります。皮膚生検というのは病変部の皮膚を一部メスで切り取って病理検査をする方法です。患者さんには少し痛い思いをしていただくこととなりますが、非常に有用な方法です。

最後に繰り返しになりますが、足の裏の黒いしみは大部分良性の疾患です。しかし大人になっ

### 今月の先生



岐阜市民病院皮膚科  
(皮膚腫瘍、アトピー性皮膚炎、皮膚科疾患全般)

### 米田和史 先生

皮膚科部長  
主な資格、認定  
日本皮膚科学会認定皮膚科専門医  
日本皮膚悪性腫瘍学会評議員  
日本皮膚科学会会員  
卒業年、主な職歴  
昭和53年岐阜大学医学部卒  
岐阜大学医学部附属病院  
大垣市民病院  
ウィーン大学第1皮膚科学教室留学